

通卷 625 号

紅葉坂

教会だより

2022年11月NO.3
横浜市西区宮崎町1
日本キリスト教団
紅葉坂教会
牧師 荒井 仁

「小は大のもと」

荒井仁

13章31節～35節

イエスは天の国を「からし種」にたとえて話されます。

トルの大きさになるそうです。葉はサラダにして食べる」ことが出来るので、イエスは「これを「野菜」と呼びます。

イエスはこのからし種を天の国のたとえとして用いられましたが食べ物として使えることはふれていません。「どんな野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て、枝に巣を

す。それと同じように、イエスと弟子たちの働きも種のようになに成長して、イエスに従う人数が徐々に増えていきます。それだけではなく、イエスの働きが弟子たちに受け継がれて広まっていきました。そし

「からし種」ですが、小さな種で一粒では目に留まらない小ささです。この小ささが表すのは、イエスと弟子たちの集団であつたと思われます。イエスと弟子たちは神の恵み、神の救いを伝える働きを担いました。最初は少ない人数で、社会全体から見ると小さな存在でした。しかし砂粒ほどの小ささとは言え、種には命が与えられています。不思議なことに神が与えた命は成長して大きくなつていきました。

「作るほどの木になる」と言って、成長してからの大きさに注目します。単に大きくなるだけではなく、その枝に鳥が宿ります。

「空の鳥」とイエスは言われます。が、ユダヤ人にとって「鳥」、特に「カラス」は、異邦人、外国人を象徴します。ユダヤ人であるイエスと最初の弟子たちが、外国人を受け入れて、神の恵みに与れるようにしたという、宣教の展開を読み取ることが出来ます。

ここで思いを向けたいことの一つは、どうして鳥に象徴される外国人が、わざわざユダヤ人の集団と関わりを持つて、そのグループに加わり、あるいは人生の基盤をそこに移したのかということです。外国人がイエスに助けを求めたのは、その人が生きる社会の中に救いが無かつた、生きづらかつたという厳しい現実があつたからではないでしょうか。その事情を察して、イエスも手を差し伸べました。

一つの話として、病気の娘を持つた異邦人の母親がイエスのもとにやつて来て癒しを願つた話があります。イエスははじめ、この願いを斥けようとした。ところが、母親はイエスにしつこく願つて、イエスが根負けをして娘を癒すことがあります。この娘ですが、医者に諦められて、助かる見込みがな

かつたのでしょうか。またこの二人には、他に家族がいなかつたと考えられます。頼る親族もなく二人だけで細々と暮らしていたことが想像されます。古代社会で家族に男性がいなきことは収入の道を断たれたようなものです。母子家庭で娘が助からなければこの母親は一人になつてしまひます。経済的にも精神的にも追い込まれていくことになります。そこに、癒しを行われると噂で聞いたイエスが近くまで来ます。藁をもつかむ思いで、必死でイエスにすがりついたのではないでしょうか。

今、日本には外国から来て、学んでいる人たち、働いている人たちが大勢います。自分の国にいる家族に送金をしている人たちもいます。そのために手元には月に3万円も残らない人たちがいます。食事を十分に摂れない人もいて、子ども食堂や食べ物を配る場所に足を運ぶ人たちが少なくありません。私たちも小さな働きであつても、どこかでこのような働きとつながることで、からし種一粒になつて、外国から来た人たちに少しでも安心を分け合いたいと願っています。

(2022年11月6日礼拝説教より)